OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	東京方言「ッテ」「ッテバ」の用法について : 文末詞的用法を中心に
Author(s)	辻, 加代子
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2001, 3, p. 77-93
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23181
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大社会言語学研究ノート』第3号（2001年3月）77-93

東京方言「ッテ」と「ッテバ」の用法について
—文末詞的用法を中心に—

辻　加代子

【キーワード】東京方言、ッテ、ッテバ、引用、文末詞的用法

【要旨】

東京方言でくだけた談話において用いられ「と言う」の縮約形とされ文末にくる「ッテ」という表現形式のうち、《引用句「～と」＋言う》という原義を離れ発話時の話し手の心的態度を表わす文末詞的な用法を、同じ様な用法をもつ「ッテバ」と比較対照しながら意味・機能について考察した。その結果、以下のようなことが明らかになった。

①伝聞用法以外の話し手の心的態度を表わす「ッテ」には大きく分けると二つの用法がある。すなわち(a)発話（内容・行為指示）を強く押し出す作用があり説得の発話態度の指標となる、(b)発話をやわらげる作用があり説明の発話態度の指標となる、という二つの用法で、それぞれ使用に際しては一定の条件を必要とする。

②「ッテバ」は①(a)とほぼ同じ用法を持つが、「ッテ」の形式より使用条件に強い制約があり、①(a)が強化された内容となりモダリティ表現としての形式化が進んでいる。

いずれも聞き手における命題確立・行為遂行の促進という機能を共有する。

1. はじめに

東京方言のくだけた談話において、「～ッテ」「～ッテバ」という表現で文を終結させることがあり、それぞれ「～と言う」、「～と言えば」の縮約形とされている（『日本語教育事典』、『江戸語の辞典』他）。

「～ッテ」はまず、下記例文（1）のように下降イントネーションを伴い伝聞の表現を構成し、また、(2) のように上昇イントネーションを伴い質問の表現を構成する。

(1)　彼女、あの映画、もう見たッテ（伝聞）　（田中 1973（21））

(2)　彼女の宝石、あなたも見たッテ？（質問）　（田中 1973（21））

この他に、下記（3）のように発話時の話し手の心的態度が色濃く反映されている用法があることも観察される。

なお、「～ッテバ」には（3）の用法はあるが、(1)（2）の用法はない。

(3)　1A：太郎、そろそろテレビゲームおしまいにしなさいよ

2B：うん

［1時間後、太郎はテレビゲームをやめない］

3A：ねえ、もういい加減やめなさいッテ
4B：わかってるッテ
［２時間後、太郎はまだやめない］
5A：いい加減やめなさいッテバさー
6B：わかってるよッテバ

(1) (2) (3) の「～ッテ」(「～テバ」) を比較すると、(1) は「～と言っていた」あるいは「～そうだ」に置き換えることにより解釈できる。「他から聞いて得た知識を自分の判断を加えず、そのまま相手に伝える」(益岡・田窪 1992) という「伝聞」の用法 (以下伝聞用法とする) である (2) は「～と言ったか」あるいは「～と聞いたがそうか」「～そうだね」で解釈できる。話し手が聞き手あるいは第三者の発言を掌握していない場合に伝聞用法の枠組みを用いて発言そのものについてメタ的に聞き手に尋ねる用法 (以下質問用法とする) である。これに対し、(3) の 3A,4B の「～ッテ」、5A,6B の「～テバ」は、「～と言った」などで置き換えるだけではもはや解釈不可能で「さっきから言っているだろう。わからないのか」などの言葉を補わねばならない。(3) のような伝聞用法から離れ「～と言った」「～そうだ」で置き換え不可能で、発話時における話し手の心的態度が反映された「～ッテ」の用法はどのようなものがあり、どんな意味・機能があるだろうか。

話し言葉で文末で使われる「ッテ」については守時(1994)、堀口(1995)、S.Suzuki(1998) 等の考察があり (3) のようないわば辞的で文末詞的な用法 (以下文末詞的用法と呼ぶ) にも言及されているが、管見によれば伝聞・質問用法と区別し前者に照準をあてた研究は見あたらない。東京方言「ッテ」の文末詞的用法の詳細はいまだ十分解明されていないと言える。しかし、そのような用法も広く使われ、それらが引用表現形式の拡張・変化過程を示しうるものと考えれば、文末詞的用法そのものの詳細を解明する意義が認められよう。

一方、方言文法の立場から東京方言と同じく「と言う」に由来し、「ッテ」・「ッテバ」より文法化が進んでいる山形市方言文末詞「ず」、山口方言文末詞「っちゃ」[1]について本ノート第２号で記述されている。そこでは「ず」、「っちゃ」の典型的な用法と東京方言「ッテ」「ッテバ」が意味特徴において共通していることが報告され、あわせて微妙な使い分けのみられる「ッテ」「ッテバ」の違いについては検討課題として残されている (渋谷 2000、舩木 2000a；2000b)。

本稿では、上述の成果を参考にしながら「～ッテ」の用法のうち文末詞的用法および「～ッテバ」の用法を考察し、両者の意味・機能における共通点と相違点を明らかにしたい。

なお、例文等の適格性の判断は東京方言話者である筆者 (0 歳から 25 歳まで東京都品川区在住) の内省による。東京方言の「ッテ」は一つの形式が発話の引用を表わす用法と心的態度を表わす用法を担っており、両用法は連続的なもので、境界も不明確であることが予想される。このような素材を考察するにあたって内省による分析は微妙な文法性判断、ポーズの有無などの確認が可能となり有効な方法だと考える。

2. 先行研究

2.1. 「～ッテ」に関する先行研究

本稿で取り上げようとする「ッテ」の形式が品詞のどのカテゴリーに所属するかに関しては、終助詞（下位分類として「文末に余情をこめる」文末助詞）（田中 1973)、終助詞的な用法（『日本語教育事典』）等見解が分かれ位置づけは確立されているとは言い難い。

意味・機能については、ストレス・トーンを伴い相手を突っ放したような言い方（田中 1977)、判断の終助詞的用法（『日本語教育事典』）などの記述があるが、本節では、さらに踏み込んだ説明のみられる守時(1994)、Suzuki(1998）についてとりあげる。

なお、音声面に関して、田中（1977）の記述にあるように筆者の内省でも普通は強調の音調を伴うと思われるが強調の仕方等に関して詳細な検討を要することであり、本稿では現象の指摘にとどめる。位相面に関してはややぞんざいな言葉づかいとの指摘がある。

守時(1994)

話し言葉における文末表現「～ッテ」の語用論的機能を以下のようにまとめている。

> 「ッテ」は、話し手が、情報源となる情報を談話の参加者が適切に理解していないと推測し、時には対話の継続が困難であると考えた場合に使用される。
>
> すなわち、「ッテ」は、情報源の情報が適切に理解されていないことを示すという談話的な機能を持つ。同時に「ッテ」という表現を用いることは、「～」がコンテクストの中に正しく位置付けられ理解されることを望むという話し手の聞き手に対する意図を表す。

Suzuki(1998)

文末詞としての「ッテ」の用例のうち伝聞用法以外の用法で話し手自身の発言内容に「ッテ」が付加された用例に読みとれる含意を「自己引用 [2]」の観点から統一的に説明している。すなわち、「自己引用」は他者の視点を談話にもちこむことであり、話し手が発話と距離をおくことを可能とする。話し手はこの仕掛けを利用して自らの陳述を偏りのない客観的な情報で明白な事実であるかのように言及し強調の含意を生じさせたり（例文 4)、対面威嚇行為となりかねない発話がもたらすはずの気まずさを冗談めかして言い発語効果を弱めることにより解消したりする（例文 5)、ということである。

(4) A：なんか　勉強してなかったから　全然。
　　B：またまた。
　　C：ほんとなんだッテ。

(5) A：首になった人がいるようなニュアンスで…
　　B：それはあなたですッテ。'That's you[said in a playful tone].'

両者を比較すると、省略形である「ッテ」の扱いに関し、守時(1994）が言表そのままの発話を分析して語用論的機能を明らかにするという方法をとっているのに対し、Suzuki (1998)は引用構文の特性から「～ッテ」の用法を説明しようとしているという異なりがあ

る、また、「～ッテ」の用法に関して、前者は「発言を強める」用法を中心に論じているのに対し、後者は「強意」と「発語効果を弱める」用法の両面をとりあげている。

本稿では、言表そのままの発話を分析することを基本に、必要に応じて引用構文の特性との関係を考えることとする。取り扱う範囲に関しては、伝聞・質問用法以外の「ッテ」の用法で「ッテバ」の用法とも重なる「発言を強める」用法を考察の中心とするが、それ以外にも話し手の心的態度を表す用法があるという立場に立つ[3]。

2.2. 「～ッテバ」に関する先行研究

「～ッテバ」は品詞分類、および意味・機能に関しては、間投助詞「上接部の語勢を強め、それを強意的に相手に示している」(梅原 1989)、終助詞「(1) 自分の意志や考えをすぐには了解しない相手に対して、反ばくの気持ちを込めて、自分の意志や考えを主張する。(2) 命令や呼びかけを表す文に付いて、相手がすぐにそれに応じないことに対するいらだちやじれったさを表す」(『日本語教育事典』) などと説明されている。また、位相面に関して「目上や改まった場面では使えない」(『日本語教育事典』) などの指摘がある。

なお、２．１．であげた守時(1994)では「～ッテバ」は「～ッテ」「～ッテサ」「～ッテヨ」と一括して分析されている。

3. 考察対象とする「～ッテ」、「～ッテバ」の限定

本稿では文末に現れ、話し手の発話時の心的態度を表わす文末詞的な「～ッテ」、「～ッテバ」を考察対象とする。したがって「～ッテ」の用法のうち、例文 (1) のような伝聞用法、例文 (2) のような質問用法、想定引用[4]、自分の発話の引用であるが引用動詞等があって倒置の形になっている場合を考察対象から除く。

4. 共起関係

4.1. 他の文末詞との共起関係

考察対象から外したが「ッテ」の伝聞用法や質問用法について言えば、直接引用句内にはすべての文末詞が現れ、間接引用句内には文末詞は現れない。いずれの場合も文末詞「さ」「よ」「ね (え)」「な (あ)」が後接できる。(＊か・＊わ・＊ぞ・＊ぜ・＊い)

本稿で考察対象とする文末詞的な「ッテ」の承接関係、共起関係は以下のとおりである。

～＋ { か / #さ / %わ / %ぞ / #ぜ } ({ よ / #い }) ({ #ね(え) / Δな(あ) }) ＋ ッテ ＋ さ[5] / よ(お)[5] / #ね(え) / #な(あ)

上記 ({}) で示した箇所は田野村「補説A終助詞」(1990:144) 東京方言の終助詞の体系による。

〈凡例〉 {}： その中の要素のいずれか一つを選択することを表す。
() ： その中の要素を選択することなく素通りできることを表す。
%： 「ッテ」の前でわずかにポーズが置かれると内省され、調べてみると人によって判断に顕著な揺れがみられたもの。
＃： 本稿で考察対象とする「〜ッテ」の用法で不適格、伝聞用法・質問用法で適格。
Δ： 「〜ッテ」の「発言を強める」用法でのみ不適格、その他の用法で適格。
記号のないものは「発言を強める」用法・伝聞用法・質問用法で適格

「〜ッテバ」の共起関係

〜＋{か, ＊さ, %わ, %ぞ, ＊ぜ}({よ, ＊い})({＊ね(え), ＊な(あ)}) ＋ ッテバ ＋ さ[5], よ(お)[5], ＊ね(え), ＊な(あ)

(6) そんなこと俺が知るか {ッテ／＊ッテバ}

(7) もう待てない。先に行ってるぞ {%ッテ／%ッテバ}

(8) わたしの話をちゃんと聞いてよ {ッテ／ッテバ}

(9) A：もう時間だよ。早くしろよ
B：わかってるわ {%ッテ／%ッテバ}。すぐ行く {＃ッテ／ッテバ} さ

(10) ねえお父ちゃん、このおもちゃ買って {？ッテ／ッテバ} よお

以上、他の文末詞との共起関係の判断はたいへん微妙で、５節で改めて検討するが、「ッテ」「ッテバ」の引用表現形式であり、かつ文末詞的性格をもつという境界的な性格の一端を示すために敢えてここに記しておく。文末詞の承接関係をみると、発話・伝達のモダリティ（仁田 1991:19）を表す文末詞の一部を内部に含むことができる一方、少なくとも「さ」を除く独り言系[6]の文末詞が後接できないことから、文末詞の階層を仮定すると構文上外よりに位置すると考えられる。

また、適格性判断をする際、本稿では「〜」部と「ッテ」との間にポーズが置かれると内省したものは直接引用とみなして運用的に不適格、ないし非文と判断した。これは、直接話法の引用節とは、その前後とは異なった音声的特徴を伴って発話された引用節であり、直接・間接話法を区別する極限的な境界は「ト」の前でポーズが置かれるかどうかで規定される、という渡辺(1997)の見解に準拠したものである。

なお、上で文末詞との承接関係の適格性判断をする場合、文末詞と句末にくる間投助詞や単独で自立語となる感動詞の類は区別して考えた。したがって、「ねえッテバねえ」のような例は検討対象外となる。

以下「〜ッテ」とする場合、特に断らない限り文末詞的な「〜ッテ」のことを指す。

4.2. 「〜ッテ」、「〜ッテバ」と共起する文タイプ

基本的に共起制限なし。独り言では使用不可。

ただし、疑問語(WH)疑問文、真偽（Yes-No）疑問文、意向形には以下のような意味的な制約がある。また、「て形」の命令文にも付加可能。

(11) いつ言った｛#ッテ／＊ッテバ｝(疑問語疑問文)［#は質問、といかえし可］
(11') いつ言ったか｛ッテ／ッテバ｝　(疑問語疑問文・反論)
(12) 何がおかしいか｛ッテ／＊ッテバ｝、…(疑問語疑問文・提題)
(13) 誰がそんなこと言うか｛ッテ／??ッテバ｝(疑問語疑問文・反語)
(14) 明日雨降るか｛#ッテ／＊ッテバ｝(真偽疑問文)
(15) 夏に雪が降るか｛ッテ／??ッテバ｝、馬鹿なこというなよ(真偽疑問文・反語)
(16) 明日映画見に行こう｛ッテ／ッテバ｝(意向形・勧誘)
(17) そろそろ帰ろう｛#ッテ／＊ッテバ｝(意向形・話し手の意志)
(18) 早くしろ｛ッテ／ッテバ｝(命令形)
(19) ちゃんとひとの話を聞いて｛ッテ／ッテバ｝(て形・命令)
(20) そんなこと遠慮するな｛ッテ／ッテバ｝(禁止)　田中(1977;441)

5. 「～ッテ」「～ッテバ」の意味・機能

2.1.で「～ッテ」には複数の意味・機能が認められるとしたが、記述を進めていくにあたって、文末詞的な「～ッテ」を「～ッテ$_1$」、「～ッテ$_2$」に分類する。

まず、前節まで「発言を強める用法」とした(21)のような類を「～ッテ$_1$」とする。「～ッテバ」は「～ッテ$_1$」とほぼ同じ環境に現れる。

(21)(≒3) 1A：太郎、そろそろテレビゲームおしまいにしなさいよ
2B：うん
［太郎はテレビゲームをやめない］
3A：ねえ、もういい加減やめなさい｛ッテ／ッテバ｝
4B：わかってる｛ッテ／ッテバ｝

次に、(22)のように「発言を強める」機能を持たない類を「～ッテ$_2$」とする。「～ッテバ」は「～ッテ$_2$」の出現する環境には現れない。

(22) 店員：ずいぶん熱心ね。何見ているの？
ルパン：いや、なに、古い指輪を拾ったんでね。値うちのものかなッテ
(許 1999 (17))

本節では、会話の当事者である話し手と聞き手にとっての「～」部の情報の新旧、心中における命題・思念の確立度という観点から各形式を検討していきたい。

5.1. 「～ッテ$_1$」、「～ッテバ」に共通する用法の中心的意味・機能

「～ッテ$_1$」「～ッテバ」の典型的な用法は、例文(21) 3A や 4B のように、話し手が聞き手に発話時に先行して現実に発した発話そのもの、もしくは類似の発話を引用する用

法である。

(21) 3A、4Bを例にとって「～ッテ$_1$」「～ッテバ」の使用条件を考えてみよう。

「～」部はすでに1A、2Bとして提示済みであり、3A、4Bの発話者と聞き手双方にとって旧情報であり、話し手は聞き手が知っていると認識している。伝聞の形式をとっていても「～」部が話し手本人の直前の発話と同じであれば、実証性判断のカテゴリーに分類される伝聞の表現がもつ不確実性はなく、話し手にとって「～」部が既述でそれを聞き手が認識していることは自明であり、「～」部が表す命題・思念（テレビゲームを聞き手にやめさせる・自分がテレビゲームをやめる）は話し手の心中で発話時以前に確立している。しかし、聞き手は指示された行為を実行していないか（テレビゲームをやめない）、命題を受容していない証拠がある（3Bの発言）。話し手はなお聞き手に指示した行為の実行、命題の受容を望んでいる。このような条件を前提として3A、4Bが発せられる。

(23) Cのように先行する発話の真偽に言及する場合も上に準じて考えられよう。

(23)（＝4） A：なんか　勉強してなかったから　全然
B：またまた
C：ほんとなんだ｛ッテ／ッテバ｝　（Suzuki 1998（30））

さらに、「～ッテ$_1$」の用法の周辺には、(23)のように先行する発話がない例もある。

(24) おい、こいつめ、いい加減にしろというんだ　（＝藤田1999（30））

(24') おい、こいつめ、いい加減にしろ｛ッテ／ッテバ｝　（≒藤田1999（30））

藤田1999では(24)の例文について、『『トイウンダ』といった文末を助辞的に付加することで、発言を強めるといった言い方も、引用構文の形をとって、リアルタイムに言明しつつそれに言及する表現」としている。(24')もそれに準じて解釈できよう。

(24')では、話し手の「聞き手はいい加減に何かをやめる／するべきだ」という判断、聞き手に「何かをやめさせる」という行為指示の意志が発話時に成立し、「ッテ／ッテバ」を付加した表現として提示されている。このような表現形式をとる場合、行為指示の意志は、発話時に成立したものであっても、その意志は相当に強く、強いだけの理由、例えば［聞き手はしつこく騒音を出している］などの聞き手にとっても明白な前提がある。一般化すると、「～」部の思念が話し手の心内で確立し、聞き手が関連する前提知識を持っていることが明白だという場合には「～ッテ$_1$」「～ッテバ」を使用できる。

では、会話の一方の当事者である聞き手にとって新情報であることが明白な場合、「～ッテ$_1$」、「～ッテバ」は使えるだろうか。

(25) A：（電話で）そっちの天気はどう？
B：うん、いい天気だ｛＃ッテ／＃ッテバ／よ｝　（渋谷2000（16））

(26)［トピックの新規導入部］
京都駅で、切符を買おうとしたんだ｛＃ッテ／＊ッテバ｝。そしたら財布忘れてきたことに気がついたんだ

(25) (26) のように聞き手にとっては未知の情報であり、そのことを話し手は認識している場合、「ッテ$_1$」「ッテバ」は使用できない。ただし、若年層の東京方言話者に尋ねたところ、(26) のようなケースで「ッテバ」を聞いたことがあるとしている。ノダ文に付加される「ッテバ」は、トピックの新規導入という語用論的な機能を担う方向に用法を拡張しつつあるのかもしれない。この点の検証については今後の課題としたい。

しかし、聞き手にとって新情報であることが予想されても談話の応答部にたつ下記のような場合は使用できる。

(27) [談話の応答部]

A：車に気を付けてね

B：わかってる {ッテ／ッテバ／よ}

(27) B では「ッテ」「ッテバ」を使用したほうが「よ」より語気が強く感じられる。「ッテ」「ッテバ」を付加することにより「わかっている」という字義通りの意味を伝えるだけでなく「A に言われるまでもなく B は車に気を付けようと思っている。それなのに A は B のそのような思念を察知せず(26)A の発言をしている」という話し手 B の主張・認識が前面に出て、結果としていらだちのニュアンスが生じると考えられる。

同様に談話の応答部にたつ用法として以下のようなものがある。

(28) [反ばく]

A：お前、誰にも言わないって約束したのに、あのことしゃべっただろう？みんな知ってたぞ

B：おれ、しゃべってない {ッテ／ッテバ}。何かの間違いだよ

(29) [確信の表明]

A：彼は無実だろうか？

B：彼は絶対無実だ {ッテ／ッテバ}。誰がなんと言おうと俺は信じてるよ

B'：おそらく無実だな[7] {＃ッテ／＊ッテバ}

(30) [意志の表明]

A：原稿、本当に今日中に仕上がるかい？

B：大丈夫、今日の夕方までには絶対仕上げる {ッテ／ッテバ}

(28) ～ (30) の「～」に入るのは話し手の過去の行動の有無や確信や意志である。これらは話し手に属し聞き手に属さない情報、いわゆる話し手のなわばり (神尾 1990：22,33) にある情報であり、話し手にとって自明であるか、判断や意志決定はすでに済み確定している。これらは話し手が実際発した発話や、(31) のように直接五感で感じた感覚などとともに、話し手の心中で確立した命題とすることができる。

(31) A：[窓をあけようとする]

B：寒い {ッテ／ッテバ}。窓開けないでよ

したがって (29) B'のように確信のもてない内容には用いられない。ただ、話し手の心

中で確立した命題という場合、すでに定まっていることがらである必要はない。話し手の推論により成立した命題でもよい。この点既定性の認められる「のだ」とは異なる。

(32) A：太郎は合格すると思う？

B：ぜったいに合格する｛ッテ／ッテバ／＊んだ｝　　(≒田野村 1990:10)

また、いずれも先行する質問等がなければBの発話は不適格である。先行する発話こそないが関連する文脈が与えられ、「～」部が話し手の心中で確立しているという条件があると「ッテ」「ッテバ」は使用できる。この場合、「～」部の内容を聞き手に一方的に伝え聞き手の疑念や反論を封じる形で当該の話題をめぐるやりとりの終結をもたらす。話し手の主張を強める効果が生じると言ってもよいだろう。

行為指示型の文で「ッテ」「ッテバ」が使用できるものとして (21) の 3A、(24') のような命令文以外に下記のようなものが考えられる。

(33) [て形・命令]

(打ち上げ花火の準備をしている大人のそばによってこようとする子供に)

1A：危ないから近づかないで

2A：近づかないでッテ

3A：近づかないでッテバ

(34) [勧め・挑発]

1A：やーい、飛べないだろう

2B：うーん

3A：くやしかったら、飛んでみろ｛ッテ／ッテバ｝

(35) [勧誘]

A：困ったなあ

B：だから、なにはともあれ、相談に行こう｛ッテ／ッテバ｝

いずれも、「～」部に先行する同じ内容の指示があり、「～」部は話し手と聞き手双方にとって既知の内容であることは明白であるにもかかわらず聞き手の行動が伴っていないという条件下で使用されている。「～」部を繰り返し「ッテ」「ッテバ」を付加することで聞き手の実行を強く促すこととなる。(24') のような前提条件がある場合も使用できる。

先行する指示も何らかの前提条件もない初めての指示の場合はどうだろうか。

(36) [命令・新規]

明日は会社は休みだろ？　よかったら泊まっていけ｛？ッテ／＊ッテバ｝

(37) [勧誘・新規]

そうだ、展覧会の切符２枚もらってたんだ。よかったら見に行かない｛＃ッテ／＊ッテバ

(38) [テ形命令・新規]

ちらし寿司つくったの。よかったら食べて行って｛＃ッテ／＊ッテバ｝

このように発話の場で新規に導入されたことが明らかな行為指示文に「ッテ」「テバ」は付加されない。ただし、「～」部が命令形をとる（36）のような場合、新規に導入されたものであっても少し許容できると感じられる。この場合、「泊まっていけ」という命令形をとった発話を「ッテ」が聞き手の気持ちに添う感じで和らげているように感じ、「よかったら」という表現ともかみあうからだろうか。これは後述する「～ッテ$_2$」の用法ということになる。

また、意向形を使って自分の意志を表明することはできない。自分の意志を表明する場合には、「～っと」という形式があり、「ッテ」を使うと勧誘の表現になってしまう。「～っと」は仁田(1991)ではシヨウ形は「無標的な使い方が、心内発話や聞き手不在発話」であり、「～っと」は「回りに人がいる状況を独話状況にしてしまう」（独話化の）表現形式で「っと」で終わるタイプの文は聞き手不在発話と聞き手存在発話の中間に位置するとしている。「～ッテ」「～ッテバ」が聞き手不在発話と相容れないことがわかる。

（39）［意向形・意志の表明］
あの映画面白そうだから、絶対見に行こう｛っと／＃ッテ／＊ッテバ｝

（40）［意向形・発話とほぼ同時に形成された意志の表明］
さあ、そろそろ出かけよう｛っと／＃ッテ／＊ッテバ｝

（41）のような発話時に形成された意志は意向形でなくても不適格である。

（41）［意志・発話時に形成された意志の表明］
さあ、そろそろおいとまします｛＃ッテ／＊ッテバ｝

（42）［意志・発話時に形成された決断の表明］
よしっ！私が行く｛＃ッテ／＊ッテバ｝

（43）さてと、この辺でやめにするか｛っと／＃ッテ／＊ッテバ｝

さらに、判断のあいまいさを予告する「どうやら」「多分」などの副詞と共起できず、発話時に形成された、あるいは形成途上にある認識を示す場合も不適格である。

（44）どうやら、この勝負、君の負けらしいな｛＃ッテ／＊ッテバ｝（≒林 1983:47）

以上（39）～（44）から、以下のことがわかる。

① 形式上意向形を意志を表す為には使えず、助詞「か」、「な[7]」と共起できないこと、内容面で発話時に形成された意志や決断の表明には使用できないことから、話し手の内部における情報の確立が「ッテ」「ッテバ」の使用条件となっている。

② 「～ッテ$_1$」「～ッテバ」と独話化の表現形式とされる「～っと」の対立関係から、前二者にはっきりした聞き手目当て性がある。

（45）の例にみられるように丁寧体と共起できることも聞き手目当て性があることの傍証となろう。

（45）ええ、わかってます｛ッテ／ッテバ｝（田中 1973）

ここまでの考察から、「～ッテ$_1$」「～ッテバ」を使用できる典型的な条件として以下の

6点を挙げることが出来よう。

(46) Ⅰ.「～」部は話し手によってすでに一度は述べられていることを基本とするが、Ⅱ. の条件が満たされていればその限りではない。

Ⅱ.「～」部は、話し手の心中ですでに成立し、確立した命題・思念である。

Ⅲ. 話し手は、「～」部が聞き手にとって既知の情報であると認識している。

Ⅳ. 聞き手目当て性がある。

Ⅴ. 話し手は「～」部の命題が聞き手の心中でまだ確立していない、あるいは指示した行為が聞き手によって遂行されていないと感じている。

Ⅵ. 話し手は聞き手に「～」部の命題を確立させ、あるいは指示した行為を遂行させようという意図をもっている。

Ⅰ～Ⅵの条件が満たされて「ッテ」「ッテバ」が付加された発話は話し手の主張や指示が前面に出て聞き手にその主張や指示を理解して受容することを要請するという広い意味での説得の含意が生じ、Ⅲの認識が確かでⅤの聞き手の認識と話し手の認識との落差が大きく、Ⅵの意図が強固な場合、いらだちのニュアンスが生じると考えられる。

また、このような「～ッテ$_1$」「～ッテバ」の用法の意味・機能は、山形方言の「～ズ」(渋谷 2000)、山口方言の「～ッチャ」(舩木 2000a ; 2000b) のプロトタイプ的な用法の意味・機能とおおむね同じだといえる。

5.2. 「～ッテ$_1$」と「～ッテバ」の相違点

「～ッテ$_1$」と「～ッテバ」に共通する使用条件を (46) に記した。しかし、「～ッテ$_1$」と「～ッテバ」を詳細に比較すると両者に微妙な違いが認められる。

まず、「～」部が疑問文の場合、疑問という形式自体が本来〈Ⅰ.「～」部の情報は、話し手の心中で確立した情報である〉ということに対立するものであり、そのことが疑問文と共起する「～ッテ$_1$」と「～ッテバ」のふるまいの違いに関与していると思われる。

(47) [疑問文・反語]

A : この仕事誰か手伝ってくれるとありがたいんだけど

B : そんな危ない仕事誰がする {ッテ／＊ッテバ} (＝誰もしないよ)

A' : この仕事君が手伝ってくれるとありがたいんだけど

B' : そんな危ない仕事誰がするか {ッテ／??ッテバ} (＝僕はまっぴらご免だ)

この場合、反語の自問自答の形をとり形式的にであれ話し手が命題の真偽といった情報を知らないということを条件とする質問の形式が上記Ⅰの特性を強くもち、もちかけ性の強い「ッテバ」と衝突すると考えられる。

(48) [問い返し]

A : 籤を入れてよ

(中略)

B：籍｛ッテ／＊ッテバ｝？　　（高橋 1993:25）

高橋(1993)によると「～ッテ」は「～というのは」の意味でテーマつくりの形式になる場合があり、「～ッテ」がテーマになる場合、ふつうは、「問い返し」である、としている。(48) B の「籍ッテ」は「籍を入れてというけど、それはどういうことだ」と相手の言葉そのものというより発話意図を尋ねていると考えられる。発話意図を尋ねるということになると「今まで現状でうまくいっていると思っていたのに、急にどうしてそんなこと言い出すんだろう」など、話し手の不審に思う気持ちなどの心的態度が反映されるということにつながる。

舩木(2000b)では、問い返し（舩木では「聞き返し」）の用法で一般的な引用表現と異なるニュアンスが生じるメカニズムを以下のように説明している。

> 話し手は、自分の既定の認識が直前の聞き手の発話内容と照らして異なっていることを理解した上で、直前の聞き手の発話をメタ的に引用し繰り返す。これによって、話し手は聞き手の発話内容を信じられないでいる、あるいは信じがたいと思っている、といったニュアンスが生じていると考えられる。

「問い返し」と同じ表現形式をとる発話が文脈によって「聞き返し」として機能する場合もある。

(49) A：すまないけど、うるさいから、ラジオを小さくしてくれないか。
B：ラジオがうるさい｛ッテ／＊ッテバ｝？　　（堀口 1995 (4)）
B'：ラジオがうるさいんだ｛ッテ／＊ッテバ｝？

堀口（1995）でも述べられているように、(49) では、A の発話がよく聞き取れなくて「ラジオがうるさいと言ったか」の意味で B の発話が発せられた場合「聞き返し」の解釈が、B がラジオはつけているが音が外にもれるはずはないと思っている場合などは「問い返し」の解釈が成立する。いずれも聞き手の発話をおうむがえしに繰り返して質問するという形をとっており「～ッテバ」は使用できないという点では変わらない。

なお、「のだ」（例文では「んだ」）に後接する場合「問い返し」の解釈となる。これは説明のムードを表す形式とされる「のだ」（益岡・田窪 1992:131）と「ッテ」と疑問形式とが加算された結果と考えることができよう。

文末用法ではないが（50）の提題の用法で聞き手の発言を繰り返す場合も同様である。

(50) A：いつ渡米するの？
B：いつ｛ッテ／＊ッテバ｝来年の４月だよ

(48) ～ (50) の説明をまとめると、「～ッテ$_1$」は、「～」部が直前の発話と一致していれば、つまりイコン性（類同性）があれば、[(46) Ⅱ.「～」部は、話し手の心中で確立した命題である」という要件を満たさなくても使用できるが、「～ッテバ」は使用できないということになる。「ッテ」の方が引用表現の性質を強く保持していると言えよう。

「ッテバ」が疑問文と共起できるのは（51）のような場合である。

(51)（≒11'）[反論]

そんなこと俺がいつ言ったか｛ッテ／ッテバ｝　(疑問語疑問文)

(51) の場合、「いつ」という命題関数は聞き手による補充を求めて使われているのではない。「話し手はまったく言っていない」という命題を聞き手に納得させるためのレトリックとして反問している。聞き手が解答できなければ有効な反論となる。

同様に「ッテバ」が使用できる例として (52) のような場合があげられる。「〜」部が「のだ」文となっており、「のか」の持つ背後の事情説明を求める（田野村 1990:54-69）という意味が「ッテバ」により補強され、聞き手に強く理由説明を求めるというニュアンスが生じている。他方「ッテ」を付加してもそのようなニュアンスは生じない。

(52) 一体どうしたんだ｛#ッテ／ッテバ｝

(51) (52) から質問の解答を強く聞き手に迫るような場合「ッテバ」が使用できると考えられる。「ッテバ」のもちかけ性の強さのあらわれと考えられる。

さらにあと一つ［(46) Ⅱ.］の条件に抵触する可能性のある例文をあげる。

(53) それにしても、あんな幼い子がよく一人で行けた｛?ッテ／＊ッテバ／もんだ｝

舩木(2000b (28))

これは、舩木(2000b) で「事実による話し手の既定の認識の変更の表示」とされている用法で、話し手の常識のようなまさに「既定の認識」[8] が事実によって書き換えを迫られるような場合の言い方で、結果として驚きを表示することにもなる。この用法は「ッテバ」は無理だが「ッテ」はいくらか許容できるように感じる。特に例文 (54) のようになかばフレーズ化した「よく言うって」のような言い回しは許容度が高いと感じられる。

(54) それにしても見え透いたことをぬけぬけとよく言うッテ／＊ッテバ

(54) の例は二人称が主格に立つ文である。聞き手領域の事柄に言及していても話し手の判断を表明する場合「ッテ」は許容されると思われる。判断自体は話し手のものだからであろう。しかし、上の用法は「ッテバ」にはない。これは「ッテバ」は話し手における発話時の認識変更を許さないほどに確かな認識の「既定性」を必要としていると言えるだろう。このことは次に述べる持ちかけ性とも連動してこよう。

次に［Ⅵ. 話し手は聞き手に「〜」部の命題を確立させ、あるいは指示した行為を遂行させようという意図］、すなわち「もちかけ性」の強さについて考えてみると、例文 (3) では終助詞「よ」と「ッテ」、「ッテバ」は時間軸の上で よ→ッテ→ッテバ の順に現れ、この順序が替わると不自然になる。例文 (33) でも同様である。時間軸にそって話し手の期待と現実とのギャップが大きくなり、そのギャップに比例して よ<ッテ<ッテバ の順にもちかけ性が強くなっていると言える。「〜テバ」の持ちかけ性の強さはイコン性を保持する度合いが低いこととともに辞的形式化が進んでいることを表していると言えよう。

5.2. 「〜ッテ$_2$」の用法・意味・機能

「～ッテ$_2$」の用法には概略①話し手の第一発話である命令文や対面威嚇行為となるおそれのある発言（例文(5)）などに伴って使用され、発話を間接化しやわらげたりする、②第二発話に現れ先行する第一発話を補足し説明する、という二つのタイプが考えられる。

①のタイプとして下記のようなものがあげられる。

(55) A：こんなこと頼んでいいの？

B：私が引き受けたからには大船に乗ったつもりでまかせときなさいッテ。

(56) A：昨日はすっかり迷惑かけて

B：なに、気にするなッテ

(57) こんな所に車置かないでくださいッテ

(58) おいおい変なこと言うなッテ

これらはしかし、とりようによっては語調が強められるようにも見え、解釈に難しい点がある。いずれも「～ッテ」の「～」部が命令文で初出の内容であることは共通している。命令文に「ッテ」を付加することにより命令内容を注釈するような形となり発話が間接化され、命令文の強さが軽減され、聞き手への配慮が実現されているように思われる。

(59)（＝5） A：首になった人がいるようなニュアンスで…

B：それはあなたですッテ。'That's you[said in a playful tone].'（Suzuki1998(31)）

(59) の意味は若干不明確だが、自分の発言を他人事のように茶化して内容の深刻さを減じる言い方と解釈可能だと思われる。さらに考えると話し手の思考の中で発話時に「～」と言う自己と「ッテ」という自己とが分かれ「～」は直接話法として現れているとすることもできる。このような用法は辞的要素を含みつつも引用構文そのものに連続している。

②のタイプは以下のようなものである。

(59) 店員：ずいぶん熱心ね。何見ているの？

ルパン：いや、なに、古い指輪を拾ったんでね。値うちのものかなッテ

（許 1999（17））

(60) 1 A：新聞記者って面白そうな仕事ですね？

2 B：若いときはよかったけど、管理職になってからなんかこうやりがいがないんだな。やっぱり、デスクに座ってるのは、肌があわないのかなッテ

許(1999)は（59）の「ッテ」は「と思う」を、後件としては「指輪を調べている」のような意味を補うことで解釈できるとし、話し手自身の考えを引用して相手に何か説明を提示する用法としている。同じく「と思う」を補って解釈できる「ッテ」の用例の中には 5.1. で［確信の表明］（例文 29）、「意志の表明］（例文 30）としたもののように「～ッテ$_1$」に分類できるものもある。（59）（60）はそれとは機能が異なる。先行する発話がまずあって「～」部はその補足説明ないし言い換えとなっている。話し手が自らの内省や聞き手の反応により先行する発話が理解されていないと察し、聞き手の理解を図ろうとして発せられた発話で、主張等を強く打ち出す意図までは感じられない。広義・説明の態度指標機能が

あるとしておく。(61) は「ッテ」は「と思う」ではなく「と言う」を補うことで解釈できる例だが、同じく説明指標機能を担っていると言えよう。

(61) 1 A：さっきから雪が降ってるね
2 B：もうお湯が凍ってるでしょ
3 A：なんだって？
4 B：湯沸かし器の水、凍結してるでしょッテ

ここまであげた「～ッテ$_2$」は多様なものを含み、中には話し手自身の思考の直接引用表現として引用の枠組みで扱うほうが適切なものもある。また全体に「～ッテ$_1$」よりも、ある思考ないしは発言の行われる場にそれとは別の発言が行われる場が再現され「二重の場」(砂川 1988a;1988b) によって構成されている引用構文の特質を強く残していると言えよう。しかしながらもともと直接（話法）的な自己引用は仮構のもので話し手のなんらかの発話意図なしには成立し得ないものである。また、思考動詞の引用構文は「基本形で文末に用いられると、発話のその時点での話し手の見解・思い等の表明の表現となる」(藤田 1999) という指摘もある。そのようなものを含む「～ッテ$_2$」は多少なりとも辞的な慣習化された表現であり、全体に共通する特性をとりだすことができる。

まず、「～ッテ$_2$」の使用条件は、聞き手目当て性があること以外は (46) であげた「～ッテ$_1$」「～ッテバ」の使用条件とはほぼ相反するものとなり、下記 (62) のようになる。

(62) Ⅰ.「～」部と同一の命題は発話時以前に述べられていない。
Ⅱ.「～」部の命題・思念は話し手の心中で完全に確立していなくてもよい。
Ⅲ. 話し手は、「～」部は聞き手にとって新情報であると認識している。
Ⅳ. 聞き手目当て性がある。
Ⅴ. 話し手は聞き手に「～」部の命題ないし行為を確立ないし遂行させる、あるいは一方的に押しつける意図はなく、理解促進を目指すにとどまる。

会話は会話当事者が共有知識を構築する行為であるという観点からこのような使用条件をもつ「～ッテ$_2$」をみると、聞き手に歩み寄って命題や思念を提示・説明しようとする姿勢の表示と考えられ、命令文などでは発話をやわらげる方向に作用すると言える。

これに対し、5.1.で検討した「～ッテ$_1$」、「～ッテバ」の表現形式は、聞き手を自分と同じ認識状態に引き寄せようとする話し手の姿勢を表示し、発話を強調していると言えよう。

6. まとめ

「～ッテ」「～ッテバ」のうち「～ッテ」を「～ッテ$_1$」と「～ッテ$_2$」に分けその成立条件・意味・機能について前節で比較対照を試みたが、それぞれの形式の使用に際しての前提条件等を整理すると概略次頁【表１】のようになる。

以上、東京方言で話し手の心的態度を表わす「～ッテ」には大きく分けて二つの用法があること、それら及び「～ッテバ」は聞き手における命題確立・行為遂行の促進という機

【表１】「～ッテ$_1$」「～ッテバ」「～ッテ$_2$」の使用条件・機能等の比較

使用条件等 / 文末形式	「～」部が既述	話し手における命題・思念の確立状況	話し手の把握している聞き手における命題の認識状況	聞き手目当て性	話し手の感じている聞き手における命題の確立状況	もちかけ性	機能・使用によって生じる含意
～ッテ$_1$	基本的に既述	基本的に確立	認識有り	有り	低	有り	強調・説得
～ッテバ	基本的に既述	確立	認識有り	有り	低	大	強調・説得
～ッテ$_2$	そのままの形では述べられていない	未確立でも可	認識無し	有り	－	少	和らげ・説明

能を共有しそれぞれ【表１】のような異なりがあること、「～ッテバ」は「～ッテ$_1$」よりイコン性に依存する度合いが低くその分辞的形式化が進んでいることについて述べた。

【注】

1) 渋谷(2000)、舩木(2000a,b) では両方言とも伝聞本来の機能（自分の発話でもメタ言語的に引用する場合も含めて）は「～ズ」、「～チャ」とは別の形式が担っており、東京方言「ッテ」「ッテバ」より広い意味機能をもち、文法化が進んでいるとされる。

2) 「～ッテ」についてではないが日本語の自己引用についてはメイナード(1994) Maynard (1996) に詳しい。自己引用を自分の言った内容を自ら引用することによって発話行為との距離をおき、その効果を軽減したり、パロディー化したり、強調したりする言語操作として説明されている。

3) 許(1999)では文末の「って」には「第三者の話を伝える」、「相手に働きかける（問い返しまたは、あいての話に反発する)」、「自分の考えを引用して説明する」という三つのグループの用法があるとしており、伝聞用法以外に二つの用法を認める立場である。

4) 想定引用についてメイナード(1994)は「実際には発言していない表現を発言したかのように相手にかわって引用を通して言語化する表現」と定義している。

5) 田野村（1990）では終助詞それぞれの意味・機能については具体的に述べられていないが、ここであげた図が準拠したとされる渡辺（1968）では間投助詞性を持つ終助詞「さ」「よ」を勘案した上で位置付けが行われていると思われる。本稿でもそれにならった。

6) 森山(1997)では「ぞ」「わ」「さ」「なあ」の表す意味は、基本的に何らかの思考の展開に関わるもので、そのために、独り言としての特性に合致した意味が構成されるとしている。

7) 文末詞「な」の意味・機能を（藤田 1988)では以下のように特徴づけている。
一つの妥当な判断を得てから自分でそれに同意しこころの中で定着させる、つまり①（＝真なる内容の察知）から②（＝真なる内容の保有）への心の動きを示す

8) 舩木(2000)では「既定の認識」とは、話し手のなかで既に確定している意見や考えのことであるとしている。

【参考文献】

梅原恭則（1989）「助詞の構文的機能」『講座日本語と日本語教育４巻：日本語の文法・文体（上)』北原保雄編　明治書院

神尾昭夫（1990）『情報のなわばり理論』
許　夏玲（1999）「文末の『ッテ』の意味と談話機能」『日本語教育』101
砂川有里子（1988a）「引用と話法」『日本語と日本語教育　第４巻　日本語の文法・文体（上）』
――― （1988b）「引用文における場の二重性について」『日本語学』7-9 明治書院
渋谷勝己（2000）「山形市方言における文末詞「ズ」『阪大社会言語学研究ノート　第２号方言記述篇〈２〉』
高橋太郎（1993）「省略によってできた述語形式」『日本語学』12-9 明治書院
田中章夫（1973）「終助詞と間投助詞」『品詞別日本文法講座９　助詞』明治書院
――― （1977）「助詞（３）」『岩波講座　日本語７　文法Ⅱ』岩波書店 pp.359-454
田野村忠温（1990）『現代日本語の文法Ⅰ　「のだ」の意味と用法』和泉書院
日本語教育学会編（1982）『日本語教育事典』大修館書店
林四郎（1983）「日本語の文の形と姿勢」『談話の研究と教育Ⅰ（日本語教育指導参考書 11）』国立国語研究所）
藤田保幸（1988）「『引用』論の視界」『日本語学』7-9　明治書院
――― （1999）「引用構文の構造」『国語学』198
舩木礼子（2000a）「山口方言のチャ」『阪大社会言語学研究ノート　第２号　方言記述篇〈２〉』
――― （2000b）「引用表現形式に由来する文末詞の対照―山形市方言ズ、山口方言チャ、東京方言ッテ・ッテバについて―」同上
堀口純子（1995）「会話における引用の『～ッテ』による終結について」『日本語教育』85
前田勇（1979）『江戸語の辞典』講談社学術文庫
益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法―改訂版―』くろしお出版
仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
メイナード泉子（1994）「『という』表現の機能―話者の発想・発話態度の標識として」『言語』23-11
守時なぎさ（1994）「話し言葉における文末表現「ッテ」について」『筑波応用言語学研究』1
森山卓郎（1997）「「独り言」をめぐって」『日本語文法　体系と方法』ひつじ書房
渡辺伸治（1997）「日本語の引用節について―間接話法、直接話法そして視点―」『言語文化研究』23　大阪大学
渡辺実（1968）「終助詞の文法論的位置―叙述と陳述再説―」『国語学』72
Maynard, S.A.（1996）Multivoicedness in speech and thought representation: The case of self-quotation in Japanese. *Journal of Pragmatics* 25: 207-226
Suzuki, Satoko.（1998）Tte and nante:Markers of psychological distance in Japanese Conversation. *Journal of Pragmatics* 29: 428-462

つじ　かよこ（大阪大学大学院生）
tomiffs@mbox.kyoto-inet.or.jp